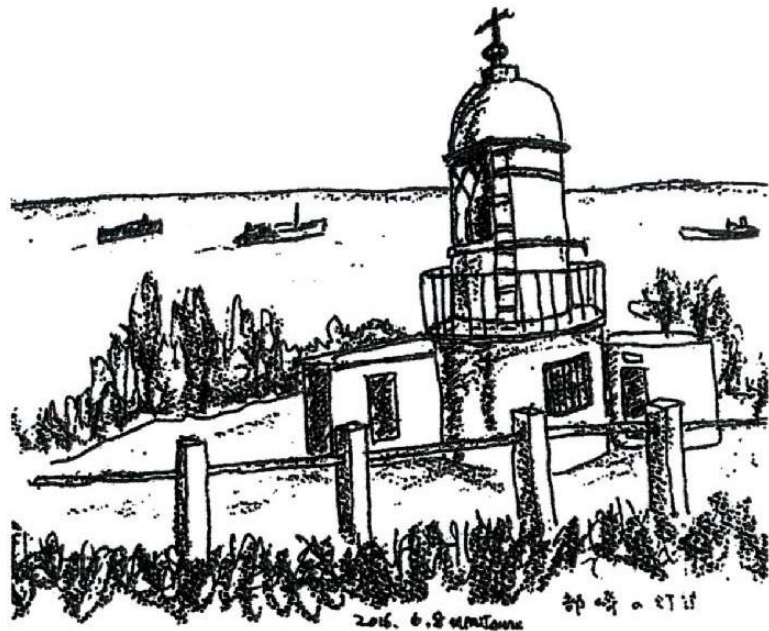


週報2022年8月21日



2022年教会標語聖句

起きよ。光を放て。あなたの光が来て
主の栄光があなたの上に輝いているからだ。

イザヤ書 60 章 1 節

シオン教会信仰指標～人生が変わる！御言葉の光に照らされて～

日本アッセンブリーズ・オブ・ゴッド教団

北九州シオン教会

牧師：山崎銀次郎

〒800-0038 北九州市門司区大里原町 6-10

TEL 093-381-4395(FAX...4396)

牧師携帯 090-6737-5276

<http://jesus.holy.jp/>



礼拝順序 2022年8月21日

ピアノ：猪口姉 オルガン：力丸勝子師

司会：小松姉 献身の祈り：松本兄 メッセージ：力丸嗣夫師

開会の祈り		司会者
信仰告白	使徒信条・標語聖句唱和	
賛美	新聖歌 220 「恵みの光は」	
祈 禱	* 今日までのめぐみに感謝し、新たな献身を祈りましょう！*	
献身の祈り		松本 兄
賛美	新聖歌 392 「主の愛の汝が内に」	
賛美	コーラス 28 「わが主捧げます」	
聖書朗読	ヨハネの福音書 5章1節～9節・19節～29節	
説 教	「死人が神の声を聴く時」	力丸嗣夫師
応答の祈り		
頌 栄	「主の祈り」	
祈 禱		力丸嗣夫師

交わりの三省

- *互いに愛し合っていますか
- *互いに赦し合っていますか
- *互いに祈りあっていますか

『死人が神の声を聴く時』

ヨハネによる福音書 5章1節～9節・19節～29節



交わり	① 互いに愛し合っていますか
の	② 互いに赦しあっていますか
三省	③ 互いに祈りあっていますか

『死人が神の声を聴く時』

ヨハネによる福音書 5章1節～9節・19節～29節

- 1節：その後、ユダヤ人の祭りがあって、イエスはエルサレムに上られた。
- 2節：エルサレムには、羊の門の近くに、ヘブル語で、ベテスダと呼ばれる池があって、五つの回廊がついていた。
- 3節：その中の大ぜいの病人、盲人、足なえ、やせ衰えた者が伏せていた。 ※4節は翻訳聖書にはどの言語にもありません※
- 5節：そこに、三十八年もの間、病気にかかっている人がいた。
- 6節：イエスは彼が伏せているのを見、それがもう長い間のことなのを知って、彼に言われた。「良くなりたいか」
- 7節：病人は答えた。「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中にわたしを入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」
- 8節：イエスは彼に言われた。「起きて。床を取り上げて歩きなさい。」
- 9節：すると、その人はすぐに直って、床を取り上げて歩き出した。

- 19節：そこで、イエスは彼らに答えて言われた『まことに、まことに、あなた方に告げます。子は、父がしておられることを見て行う以外には、自分からは何も行うことができません。父がなさることは何でも、子も同様に行うのです。』
- 20節：それは、父が子を愛して、ご自分のなさることをみな、子にお示しになるからです。また、これよりもさらに大きなわざを子に示されます。それはあなた方が驚き怪しむためです。
- 21節：父が死人を生かし、いのちをお与えになるように、子もまた、与えたいと思う者にいのちを与えます。

22節： また、父はだれおもさばかず、全ての裁きを子にゆだねられました。

23節： それは、すべての者が、父を敬うように子を敬うためです。子を敬わない者は、子を遣わした父をも敬いません。

24節： まことに、まことに、あなた方に告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死から命に移っているのです。

25節： まことに、まことに、あなた方に告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。

26節： それは父がご自分のうちに命を持っておられるように、子にも、自分のうちに命を持つようにして下さったからです。

27節： また、父はさばきを行う権を子に与えられました。子は人の子だからです。

28節： このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者が、みな、この声を聞いて出てくる時が来ます。

29節： 善を行ったものは、よみがえっていのちを受け、悪を行ったものは、よみがえってさばきを受けるのです。

新改訳第二版 1984年版 より

イエス様エルサレムへ上られる

※ エルサレムは、ユダヤ人の信じる“ヤーウェ=天地創造の神”の礼拝所である神殿が据えられているところなので、神の居ますところへ行くことを“上る”と表現したのです。

1節に、「ユダヤ人の祭りがある、イエスはエルサレムに上られた。」と、記されている。これはイエス様の二度目のエルサレム御上洛です。最初は、2章に記されています。ご存じの、カナの婚礼に招かれたイエ

ス様が、水をぶどう酒に変えられる…と言う奇跡(最初の軌跡)を顕された直後に、エルサレムに登られています。

それは、過ぎ越しの祭りのためでした。

***過ぎ越しの祭り**～イスラエルが、未だ、エジプトの奴隷状態で苦しんでいた時(紀元前1500年ごろ)モーセにより、イスラエルの民すべてが、エジプトを脱出した時を記念するお祭り。死の使いが、エジプト全土を歩き巡り、エジプト中の男子の初子(長男)が、家畜から奴隷・一般市民・貴族・王室に至るまで、その晩に神の審判の死の使いによって死んだ中、イスラエルの民には、一人の死者も出なかった。

(それは、各家で、羊を屠ってその血を入りに塗った。死の使いは、その血を見て過ぎ越した。)これを記念した祭りです。

これが、イスラエル暦では、“ニサンの月”⇒西洋歴では3月後半から、4月初めに巡ってくる、満月の日。(月齢による暦なので、日にちは毎年移動しますが、私たちが毎年深い思いで迎える“受難週”がそれで、イエス・キリストの十字架の血による罪の贖罪と、深く重複する、出来事なのです。(日本の春分の日に当たります)

主イエス様もまた、この過ぎ越しの祭りには、必ずエルサレムに上られたのです。この時期、エルサレムのすべての町々村々は、住民全てが、家族挙げ、群れをなして、上京するのです。ですから、何処も全ての人々はエルサレムに集まるので、町も村も空っぽ状態となるのです。また、そればかりではなく、世界中に離散したイスラエルの民は、この祭りを目指して、一年一度、エルサレム神殿詣でに、終結するのです。福音書の物語の多くは、このエルサレムでの出来事を記録したものです。

イエス様の伝道の方法

イエス様は、30歳になられるまで、ナザレで過ごされ、早くに亡くなられた父ヨセフに代わって、家業を継がれて、弟妹を養われました。30歳の時に、ナザレを出て、ガリラヤ湖方面に来られ、当時、この地方で、預言者として、主の恵の時を告げ知らせていたバプテスマのヨハネ

(旧約時代最後の予言者と呼ばれた)のもとに来て、彼から洗礼を受けられました。この時ヨハネは、イエス様のことを『見よ、神の子羊』と民衆に紹介しました。この時からイエス様は宣教を始められたのです。

イエス様の伝道活動の期間は、わずか3年でした。その間に、過ぎ越しの祭りが三回巡ってきますから、そのたびに、主はエルサレムへと登られたのです。エルサレムへの途上期間中に、様々な物語が記録されています。エルサレム往復の旅は、二つの経路から、①サマリヤ経由(ユダの山地・荒野を超えてサマリヤ地方を通過する道)か②ヨルダン溪谷を下って、エリコを経て、難所(よきサマリヤ人のたとえ話に出てくる経路)を経て、エルサレムへ登る経路。

(エリコは標高—260m⇒エルサレムの標高750m…標高約1000m)
この道をエリコ通過後は、ほとんど人の住まない荒野の続く、登山のような道(エリコ街道)なのです。主は一度だけ、この経路を使って、エルサレムへ登られています。

カペナウム⇒サマリヤ⇒エルサレム…二千年前の実行距離・約200km

イエス様は、三回のエルサレム伝道の他に、北方のピリポ・カイザリアへ、また、地中海側のツロ・シドンの異邦人世界へも足を延ばしておられます。主の三年間の伝道は、教会を拠点として、福音が拠点化している現代の在り方に、大きなチャレンジとなるのではないのでしょうか。

ベテスタの池で

さてベテスタの池とは、どのような所でしたでしょうか。ベテスタの池の地理的場状況を知ると、この奇跡がなぜ顕されたのか？が、深い意味を伴って理解できるようになります。

- ① この場所は、エルサレムの町を取り囲む城壁の外にあり、ヤーウエ神殿の裏の、忘れられた様な所に位置しており、また、小さな神殿がそばにあった。
- ② この池は、間欠泉(温泉ではない)のように、不定期に水が湧き上がる泉でした。大きさは、たて130m横幅は30~50mもある大きな

泉で、深さは15mもあったのだそうです。雨水が地下水となり湧水として湧く場所をさらに拡張して、造られたプールなのです。(エリシヤの時代-紀元前800年頃-に造られたようです)

- ③ この池の周りには、障害(目・耳・四肢の障害)を持った人々、病気の人々…がひしめき合うように、埋め尽くしていたのです。正に地獄絵の様な、悲惨な世界だったのです。日常から市民の生活圏から隔絶され、忘れ去られ、忌まわしい場所として、神殿からはさほど遠くないにもかかわらず、見捨てられ、神殿の丘の高い石垣や城壁から遠ざけられた、掃き溜めのような場所でした。

イエス様の足を向けられるところ

イエス様の宣教の足跡をたどると、ある事が心に留まるのです。

- *なぜ…？人々が嫌うサマリヤを通られるのか。(ヨハネ4:1~)
 - *なぜ…？エルサレムへのアクセスに困難なエリコ経由でエルサレムに来られたのか(ルカ19:1~)。
 - *なぜ…？ユダヤ人が忌み嫌う異邦人世界へ目を向けられたのか。(マルコ7:24~)
 - *何故…？ゲラサのような敵対する人々の世界へ船を向けられたのでしょうか。(マルコ5:1~)
 - *私は、退任してからの3年の働きを通して、もう一度伝道者として最初に取り組んだ、四国の西部幡多地方の伝道の日々を思い出し新たな宣教の重要性に目覚めた思いでした。
- これらの不可思議なイエス様の行動パターンは、福音書を学び、イエス様を知るために重要なヒントを、読む私たちに提供しているのです。一つ一つの出来事の陰に、創造者なる神・イエス様の父なる神の、最も大切な御思いが、秘められているのです。それが何であるのかを、ぜひあなたの目と心で、見出し、そのイエス様の視点を、あなたの視点としてください。これはクリスチャン全てにとって、重要な課題でもあるのです。同時に終末の教会の視点とならねば…と思います。

今日の物語もまた、その様な中で、学ぶことができる、大切な出来事なのです。“ベテスタの池”と言う場所については既に学んできましたので、お話を先に進めてまいりましょう。

“羊の門”の近くにある、ベテスタの池…とあります。羊の門とは、神殿に入るための門の一つで、イエス様がエルサレムにお入りになる道筋(ラザロを甦らせたベタニヤ村から、オリーブ山を通過して、ケデロン谷に下り、エルサレムに入るルートです)としては、最も普通に使われるルートなのです。多くの人々は、このルートでエルサレム入りしますが、その途中にあるベテスタの池は良く知られているからこそ、目を背けるようにして、足早に通過するほど、忌まわしく思われる場所でもあったのです。

今一つ、このベテスタの池のそばの門が、何故羊の門と言われたかなのですが、神殿に入るには最も近い門で、“燔祭”にする羊の汚れを汚れを洗い落とすための池(プール)でもあったのです。ここで洗われた羊が神殿に運ばれたので、“羊の門”と呼ばれたのです。

イエス様はこの度も、ここを通過して、エルサレムに入られるのですが、羊の門をくぐられる前に、反対側の深い谷のようになって、普通の視野には入らない、ベテスタの池へと降りて行かれたのです。周りの病人たち、二重に、三重にひしめき合うように池の周りを占拠しているところへ。しかし池の周りに集まっている焼く人々の目には、主と弟子たちの近ずいて来るのも気付かないほどに、池の水面を見つめていました。ところが、「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中にわたしを入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」…と、病人が言っているようにこの池は、間欠的に、水が沸き上がるのです。その時に水に入る人の病が直るといいます。ですから皆の目は、必死で、水面だけに集中しているのです。ところがイエス様は、そこに横たわる人に声をかけられたのです。

『よくなりたいたいのか』

言うまでもない事です。主がお声をかけられたのは、なぜこの男だったのでしょうか。その理由は、ここにたむろする多くの病人の中で、はかない希望(願い)とは言え、必死に、治ることに存在をかけている人々でした。ところがイエス様がお声をかけられた男は、その場に置かれただけで、家に帰ることもできず、かといって、飛び込める可能性は皆無なままで、ただ、皆の中に埋もれているだけの存在だったのです。ですから、イエス様のお声掛けに、反応できたのです。

主はこの様な人にお声をかけ続けられるのです。でも、彼の反応は、否定的で、「主よ。私には、水がかき回されたとき、池の中にわたしを入れてくれる人がいません。行きかけると、もうほかの人が先に降りて行くのです。」主(御声をかけた)に期待するようなそぶりも期待もなく、愚痴だけが、彼の口を通して、主に答えたのです。イエス様はこの不毛な言葉に向かって、『起きて、床を取り上げなさい。』なんと、無茶なお言葉でしょう。理屈抜きに、このやり取りは、木に竹を継いだような言葉のやり取りです。

しかし、この瞬間、奇跡が起こったのです。もうこの後の事実を描写する必要もないほど、明白な事実だけが、あるのです。彼は床(?)敷物と言いましょか、ぼろぼろのマットでしたでしょう。立ち上がって、それを丸めて立っていたのです。

周りの人々の目はさすがに、池の水面にではなく、この男と、傍に立つイエス様のお姿に集中したのです。

主イエス様は、すぐに、その場を去って行かれました。喜び踊るようなこの男は、周りの人に集中的に質問を受けたでしょう。矢継ぎ早に降るような質問に答えようと、傍におられたお方(イエス様)を振り向きざまに「このお方が……？」もうそこには主はおられなかった。

彼はイエス様を探して神殿に入っていくと、すぐに出会ったのですが、主は彼に、大切なおことばを(14節:信仰のフォロー)お語りになって、ま

た彼から去って行かれた。瞬間に、人垣ができて、神殿の中で、パニックとなりました。なぜなら、その日が安息日だったのです。

(安息日には、仕事をしてはならない…と言うモーセのおきてに沿って、ユダヤ人・律法学者・パリサイ人たちが、イエス様の業に対して、断罪を始めたからです。) ここで、もう一度、19節～29節を読んでみましょう。その様な宗教家たちの糾弾の言葉に対して、主がお語りになられたお言葉が、2

死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。

そして、聞く者は生きるのです。

実は、この御言葉こそ、イエス様の宣教のキーワードなのです。全能の御力をお持ちの主イエス様には何一つ不可能はないのです。あのベテスダの池にある多くの病める人々、障害にその全人生を失っている人々を立たせることも出来るお方ではないでしょうか…?

* 何故? ベテスダの池で癒されたのは、一人だけなのでしょう。

* 何故? イエス様は、あのガダラ人一人だけのところを訪れて、彼を開放されたのでしょうか。(マルコ5:1～20)

* 何故? スロ・フェニキヤまで出かけてカナンの女の娘を癒された。そのためだけに…? (マタイ15:22～28)

* 何故? あえて困難な道を選んで、エリコの町を通られたのでしょうか。ザアカイの回心。(ルカ19:1～10)

* 何故? 皆が避けて通るサマリヤを通過しようとされたのでしょうか。一人のサマリヤの女の回心(ヨハネ4:4～)

* 何故? 多くの人がイエス様と衣を擦れる様にしてひしめき合う中で、癒されたのは、あの女一人だけなのでしょう。(マルコ5:24～34)

* 何故? 物乞いをする多くの障害を負った人がいたのに、癒されたのは、たった一人の盲人だけだったのでしょうか。(マルコ10:46～52)

運がよかったのでしょうか…?

福音書の中には、この様な、**何故?**…が、いっぱい溢れているのです。神が人となられて、人として歩まれたカギがここに、秘められて

いるのです。そして、同時に、これが今日の教会の取り組まねばならない、大切な宣教の使命として、秘められた使命でもあるのです。

死人が神の子の声を聞く時が来ます。

今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。

イエス様は、迷い出た一匹の羊を探すために、群れの他の羊を置いて、その一匹を探す…(マタイ18:10～14)

【結び・教会の使命】

失われた魂(人=神に背いた)=死に定められた世界に沈んでいた人が、**神の声を聴く…!!** なんと驚くべき奇跡でしょう。これを奇跡と呼ぶせずして、何を奇跡と呼べるでしょう。

教会の使命はここにあるのです。

* 教会は人数が多く集まる事が勝利ではないです。

* 素晴らしい会堂が輝くのもありません。* 何万人もの聴衆を集めるのでもありません。

* 癒し奇跡が沢山頭われるための働きでもありません。

教会は、宣教の拠点なのです。そこで、霊を養われたクリスチャンが、遣わされて、死の世界の中に出て行き、**救い主イエス様のいのちの声(福音)**を届け聞かせる…そのために、またこの一週間、遣わされてまいりましょう。ベテスダへ、エリコへ、スロ・フェニキヤへ、サマリヤへ家庭へ・職場に・地域に・友のところへ遣わされてまいりましょう。…今はコロナで行けないことが多いですが…祈りましょう。あなたの愛する人の心に、イエス様の声(神の声)が、聞こえる(届く)ことを。